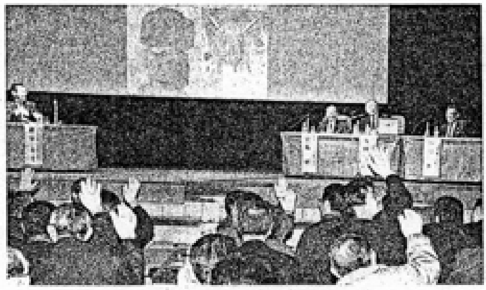
## シンポジウム「小坂流『逆ビジョン』への挑戦」

# 小さな地方から世界に発信

## 地域活性化へ秋田の自然や産業生かし

前田泰宏課長

自然や農業など地域特有の資源を生かした地域再生モデルを世界に向けて発信するシンポジウム「小坂流『逆ビジョン』への挑戦」が13日、秋田県小坂町にある「康楽館」で開かれた。経済産業省の地域活性化事業の一環で、はじめに同省文化情報関連産業課の前田泰宏課長が「これまでの情報発信は主に都市から地方に向かっていたが、小さな地方から日本、世界に発信するのが『逆ビジョン』。人、国、地球のことを考え発信しよう」とあいさつ。識者や企業の代表者の講演に、地元住民ら約550人が聞き入った。当日の模様を詳報する。【藤田裕伸、写真も】


シンポジウムはクイズで盛り上がった

パネルディスカッション「いぐ頑張ってるすなぁ・小坂」は、参加者全員にピンクと水色の手袋が配られ、クイズ形式で行われた。「小坂町の木は①アカシアか②ベニヤマザクラか？」「携帯電話1万台から回収される金の量は100ｇより①多いか②少ないか？」などが出題され、会場は笑いに包まれた。

◇　◇

**前田**　97年に小坂町で世界鉱山サミットが開かれ、川口博町長が「小坂宣言」を発表した。その中に「私たちも自然界の生命体として」とある。

**川口**　資源がなくなると地域がゴーストタウンになる事例が世界中にあったが、鉱石がなくなっても再生した街はある。サミットでまとめたものが「小坂宣言」だ。命あるものを大切にしたいという願いを込めた。

**前田**　鉱山の町として栄えた小坂町は、製錬で排出される亜硫酸ガスの影響で環境を破壊した。だが、製錬技術を活用したリサイクル事業を推進する「エコタウン事業」や、はげ山になってしまった土地に木を植えて環境を再生させる事業など、先進的な取り組みで地域を再生してきた。

**安田**　堆積物でできる「年縞」が、イースター島（チリ）で1200年に突然なくなったのは、ヤシの森を破壊したため。秋田県は自然と共生してきたから年縞が残っている。

**宮脇**　小坂町の木・ベニヤマザクラは、土地本来の植物。本物の苗を植えれば何百年も生きる。木を植えることは命と明日を植えること。そして心に木を植えることだ。

**パネリスト**

国際日本文化研究センター教授　安田喜憲氏
横浜国立大名誉教授　宮脇　昭氏
秋田県小坂町長　川口　博氏

**モデレーター**

経済産業省文化情報関連産業課長　前田泰宏氏

---

国際日本文化研究センター

### 安田喜憲教授

## 30年前の環境　実現へ

地球環境問題を考えるとき、自然と人の共存があった30年前に帰ればいい。100年以上前の江戸時代は共存のパラダイスだったが、30年で十分。そのころの環境を実現する路線を作ることが「逆ビジョン」だ。

環境改善の具体例として、兵庫県豊岡市が成功させたコウノトリの野生復活がある。30年前にはコウノトリが「ばーっ」と舞う風景がどこにもあった。同市は、ドジョウなどを生育させるため農作物を無農薬で生産したという。復活には経済効果もあった。コウノトリ見学のバスツアーで観光客が増大、無農薬米は通常の4倍の価格、1丁1000円の豆腐も大ヒットした。

コウノトリ野生復活に象徴されるように、生き物の命を大切にするのが日本人の生き方だった。秋田県に伝わる民俗行事「なまはげ」も、日本人の伝統的な心を伝えている。子供は「なまはげ」が怖くて逃げ回り、人に迷惑をかけずまじめに正しく生きることをたたき込まれている。だから、秋田県の人は優しくて品格が高い。

天皇陛下が田植えと収穫をされるのはなぜか。自らのエネルギーを投入して不毛の大地を美しく変えることが農業の喜びであることを示されているのだ。稲作での水の循環は日本人の「慈悲の心」につながる。自分の田んぼに入ってきた水はきれいなまま隣につなぐ必要がある。隣人の幸せも考えなければ成り立たないためだ。秋田県には「美と慈悲の文明」がある。この世界観を、自信を持って広めてほしい。

---

横浜国立大

### 宮脇昭名誉教授

## 命守る「森」広げたい

三十数億年前に地球で生命が誕生し、絶えることなく続いてきた。私たちは、かけがえのない命を明日に残さなければいけない。地球上では鉄や石油、化学製品など〝生物が死んだ材料〟による街づくりや産業が発展したが、命を支える環境に対して現在の科学技術や医学はまだ不十分だ。命を支えるのは「ほんものの森」で、人に残されたのは本物を見分ける能力だけ。日本人が作った鎮守の森は英知の結集で、命を守る文化の最高のシンボルといえる。

生きていくためには資源を使う。食べるものはもちろん身に着ける服も石油も植物が原料のため、地球に生きる緑の森が必要だ。緑は芝生の30倍も緑が濃縮されているため環境改善にも効果的。温室効果ガス排出量の売り買いなど小手先の対策だけではだめだ。

古代文明のローマやメソポタミアは常緑広葉樹林をつぶして都市や文明を作ったが、現代の文明先進国のエリアはより北にある落葉広葉樹林帯に移った。鉄と石油とセメントの中で、人間がいつまで生きていけるか考えてほしい。ただ、共生は仲良しクラブではない。少々苦手な相手がいても我慢し、競争しながら生きるのがいい。厳しい環境で生きる植物が本物で、工場や都市とも共生できる。

阪神大震災では、最高の技術で作った鉄、コンクリートの建造物が倒れたが、広葉樹を主とした森の木は倒れることなく、さらに炎が広がるのを食い止めた。命を守る「ほんものの木」を植えよう。

---

## 川口博町長「第2次小坂宣言」

## 循環型社会の構築を

川口博町長はシンポジウムの中で、循環型社会の構築などが柱の「第2次小坂宣言」を発表した。97年の鉱山技術の向上や地域振興を柱とした「小坂宣言」に続くもの。

川口町長は「小坂宣言から10年がたった今、あらためて意義を再考して広く世界に発信する」としたうえで、①「地球に優しい循環型社会」構築のための技術開発を推進する②「生命力強化」を求めてワークライフバランス（仕事と生活の調和を図ること）の健全化を推進する③地域が輝くことにより、日本そして世界が輝く——の三つの目標を実現するため、産学官が一体となって取り組むことを宣言した。

---

DOWAホールディングス

### 吉川広和代表取締役会長

## 都市鉱山、「製錬」で再生

鉱石から金属を分離する技術を利用したリサイクル事業は、カナダ、ベルギーと並び世界で3カ所にしかない高度な技術だ。明治から昭和にかけては鉱業全盛の時代だったが、小坂町にある「小坂製錬」の歴史は順風満帆ではなかった。85年のプラザ合意で円高が進んで鉱山の価値が下落し、鉱石を残したまま閉山を余儀なくされたためだ。

「地下資源から地上資源へ」。その後の新事業の柱となった環境リサイクルは、貴重な金属が多く使われているテレビなどの家電、自動車、パソコン、携帯電話などが原材料だった。これらを鉱石代わりにして製錬設備を使うと地下資源より価値が高いことが分かり、まとめて「都市鉱山」と呼んだ。

資源は特定の国に偏在しているが、都市鉱山は日本にたくさんある。海外も含め、集め方を工夫すれば宝の山だ。06年にケニアのナイロビで開かれた有害廃棄物の越境移動を禁じるバーゼル条約会議で「使用済みの家電機器を買い取る」と発表し、タイ、シンガポール、マレーシアの3カ国から使用済み携帯電話の回収試験を行った。今後は、中国なども視野にいれた回収計画を進めていく。

今後の取り組みのポイントは、今年4月に稼働する新製錬炉を成功させることだ。電子基板などから銅を中心に19種類の金属を回収できる世界でもまれな製錬所となる。リサイクル技術で世界をリードする小坂町になりたい。

### 北京の清華大で来月26日に講演

吉川広和氏は4月28日、中国・北京市にある清華大で講演する。住友商事と中国住友商事会社が同大で行っている共同研究講座の一つで、約1時間、「企業改革とリーダーシップについて」をテーマに講演する。

住商と中国住商は、日中双方から学識経験者や財界人などを講師として定期的に派遣しており、講座は今回で4回目。

吉川氏は、DOWAホールディングスのトップとして同社の経常利益を7年で10倍にするなど、経営手腕を評価された。

---

### 「アカシア太鼓」15人が豪快演奏

シンポジウムには、女性だけの太鼓グループ「アカシア太鼓」が出演した＝写真。地元の小中学生と高校生、町民ら計15人が「楽しく打とう夢に」「清流」などを演奏。日ごろ鍛えた豪快な動きでイベントに花を添えた。

シンポジウム 小坂流「逆ビジョン」への挑戦 ～小坂からこだまする大きな物語～
康楽館

◇小坂流「逆ビジョン」への挑戦
小坂からこだまする大きなものがたり◇

主催　小坂町シンポジウム実行委員会（経済産業省、小坂町）
後援　毎日新聞社